

# 市民参画デザインの検証

——広島市都心部の民間主導の

策定プロセスを対象に——

木 原 一 郎

## 1. はじめに

まちづくりや都市計画の実践・検証に際して、積極的に市民参画の機会が模索されるようになって久しい。これまで効率的で前例主義である行政の計画のもとで、画一的で個性の少ない都心部が形成されてきた都市が目立つ。現在ではモータリゼーションの見直し、環境に配慮された都市への転換、災害に強い都市への転換を機に、個性があり人々を惹きつける魅力のある都市への転換が試みられている。その動きの中で都市の個性を生み出すための糸口を得るために期待されているのが市民参画である。そのように市民参画の要請が高まりを見せ始めてから、様々な手法が模索されている。

市民参画はボトムアップなまちづくりと表現される場合がある。本来ボトムアップなまちづくりという場合、行政主導（トップダウン）ではなく、民間主導全般を指し、一般市民だけではなく民間企業なども含まれる言葉である。それにも関わらず一般市民だけを指した取組や認識が散見される。これは現状を打破するきっかけとして、市民参画への期待の現れでもあるが、ボトムアップとトップダウンの隔たりの現れであるとも考えられる。この両者を結びつける手法や仕組みも数々模索されてきた。戦後の都市計画やまちづくりは行政が行うものと位置付けられ、市民や民間企業はまちづくりに対して受け身の姿勢だった時期がある都市も少なくない。そのた

めか今でも一般市民や民間企業の発言にまちづくりは行政がやるものだという意識がいまだに見え隠れする。行政でないとできないことも必ずあるがその受け渡しがうまくいっていないと考えられる。ボトムアップとトップダウンのバランスが必要であり、ボトムアップで考えられたことも上位計画に位置付けないとただの妄想で終わる。また近年では市民参画を条例で定めている自治体などもあり、行政主導のプロジェクトでも多用されている。そのため義務感や既視感が生じ、市民参画という言葉自体が市民参画の壁となってしまっている場面も見受けられる。それは市民参画の場のあり方が関連するのではないかと考える。ボトムアップとトップダウンをつなぐ仕組みが必要とされている状況の中で、市民参画はどのような場であるべきか、どのようなことを市民に求めることが有効なのかを検証する必要がある。

本研究の目的は、市民参画の効果と課題について検証することである。中でも一般市民や来街者自身の考えを伝える場に注目する。異なる手法を用いた市民参画の場から得た結果を比較することにより、その手法や場の効果について検証し、課題を整理する。

まず、2章では市民参画に関する研究動向をまとめ、本研究の位置付けをする。3章では本研究で対象とした市民参画の場について、導入までの背景をまとめる。4章と5章では、今回採用した2つの市民参画の手法と場の概要をそれぞれまとめ、6章ではそれぞれの手法と場を導入することによって得られた情報を比較分析し、市民参画の手法と場の効果と課題について整理する。7章でまとめ、今後の研究の課題を整理する。

## 2. 市民参画に関する研究の動向と本研究の位置付け・対象

市民参画の手法は、パブリックコメント、市民説明会、フォーラム、シンポジウム、審議会、ワークショップ、アンケート、ヒアリング等、さまざまなものがあり、それぞれ研究が進んでいる。しかし、状況や目的に応じてどのような手法や場が有効かについての研究は少ない。また石巻の事

例（佐藤ほか，2018），八戸の事例（生田ほか，2020）のように，実施地域の固有の環境や状況も考慮する必要がある。広島都心部における市民参画の手法や場についての研究は少ない。

ボトムアップとトップダウンをつなぐ組織の研究も進められている。アメリカ合衆国オレゴン州ポートランドのネイバーフッドアソシエーション（鶴田ほか，2017；宋ほか，2019）などが代表的な例である。ポートランドではオレゴン州土地利用計画の19の目標の一つ目に市民参画が掲げられている（岩渕ほか，2017）が，形骸化しておらずネイバーフッドアソシエーションなどの取り組みを通して実のあるものになっている。ネイバーフッドアソシエーションはポートランド市に承認された組織である。市民参画の評価をする際に用いられる指標として，市民参画の梯子（Sherry, R. Arnstein, 1969）やPublic Involvement Toolkit（Eileen Argentina and Jo Ann Bowman, 2006）などが挙げられる。行政自体や行政に承認された組織と，一般市民との関係性の中での評価に用いられる場合が多い（三浦，2021）。本研究で取り扱う組織は広島市・広島県がオブザーバーに入っているが，任意の民間団体である。行政ではなく民間団体によって設けられた一般市民や来街者の参画を促す機会を研究の対象とし，その取り組みの効果を検証する。

一つの施設づくりにおける市民参画の研究（三矢ほか，2013）は数多く進められている。筆者も専門性の高い知識や技術が必要とされる段階において，知識や技術を持ち合わせていない一般市民でも参画できる仕組みの研究（木原，2017）をおこなった。本研究では都市マスタープランや地区計画へ組み込まれることを前提としたビジョン立案の取り組みを対象にする。そのため1施設の計画に比べ長期的視点が必要になる。

これらを踏まえて本研究では市民参画を一般市民や来街者の意見や要望を引き出し，将来計画や成果物に組み込むことと定義する。特に本研究では将来的には都市マスタープランや地区計画などのトップダウンの政策等の中に組み込まれることを目的とした民間主導のビジョン立案の取り組み

を対象とする。具体的には「カミハチキテル -Heart of Hiroshima-」のビジョン立案に関する取り組みを研究対象とする。

### 3. カミハチキテルでの将来ビジョン検証における市民参画

今回研究の対象とする市民参画の手法と場は、エリアマネジメント団体である「カミハチキテル -Heart of Hiroshima-」（以降カミハチ HH）によって実施されたものである。主な構成員は、紙屋町・八丁堀の地権者や近隣に店舗・拠点を構える民間企業が中心であり、他には商店街、NPOなどが参画している。広島市、広島県はオブザーバーとしての参加にとどめており、民間主導の任意団体である。

カミハチ HH は、前身の「紙屋町・八丁堀エリアマネジメント実践勉強会」時代から、広島都心部の紙屋町・八丁堀を中心とした都心再生のためのビジョン立案に取り組んできた。2021年10月には ver 0.5として「カミハチミライデザイン（以降ミライデザイン）」の第一弾を公開した。カミハチ HH の構成員でビジョン案の検討を進め、社会実験を通して検証し、立案したものである。民間企業中心に検討を進めたため、公共空間や都心空間のエンドユーザーである一般市民や来街者の声に関しては十分に反映していない。本来であればミライデザインはカミハチ HH の構成員のために検討されたビジョンであるため市民の声の反映自体は不十分でも成立はする。しかし、広島市の条例・地区計画や政策に組み込むことを目標とする場合、市民の声は確実に後押しになる。またミライデザイン立案議論の中心テーマに据えていたのは、これまでの車中心・優先であった都心空間から、人中心・優先の都心空間に変えていくことである。内容面から考えても一般市民や来街者の声は重要なものになる。そのため、今後いかに一般市民や来街者の声を聞く場を作っていくかが課題であった。

これまで各地で作られてきたビジョンは、完成したら後は実装あるのみであり、ビジョン自体の見直しまで十分にできているところは少ない。今回カミハチ HH から提示するミライデザインについては、ターゲットイヤー

を被爆後100年の2045年としており猶予があることもあり、今後も更新することを前提としている。随時時代の変化に対応していけるように設定した。その仕組み自体の有用性を検証するために、ミライデザイン発表前に市民参画を実験的に試みた<sup>1)</sup>。

1つ目は社会実験の場でそこを訪れて滞在していた方にアンケート調査を実施した。2つ目は都心部に複数の場を同時に設定し、投票式アンケートで立ち止まった通行人を対象に、任意で街頭ヒアリング調査を実施した。この2つの市民参画は、設えや手法は全く異なるものの、いずれも市民の声を汲み取り、検討中であったミライデザインの裏付けや補完を行うために実施した。これらの二つの調査結果を対象とし、比較分析を行うことで、市民参画の手法と場の効果を検証し、課題を整理する。

#### 4. 社会実験「#カミハチキテル -Motomachi Cred Urban Terrace-」

社会実験「#カミハチキテル -Motomachi Cred Urban Terrace-」(以下カミハチ2 (図1))は、広島市中区の基町ふれあい広場で実施した社会実験である。

カミハチ2は、カミハチ HH が企画・立案・運営を行なった。この社会



図1 カミハチ2の様子  
出典：カミハチ HH 事務局

1) 筆者は、本事業に関与しており、事務局及びディレクターとして社会実験の企画・設計及びミライデザイン作成に関する助言等を行っている。

実験で創られた空間は、検討中であったミライデザインに掲げている内容の一部を体現した空間であり、実際の都市空間の中で未来を仮体験することができるものであった。コロナ禍以前は、基町ふれあい広場は貸しスペースとして位置付けられており、広島カープのパブリックビューイングなど、多くの集客を伴うイベント利用が中心であった。コロナ感染拡大防止策の一環としていわゆる密状態を避けることが常識となった現在では、広場の利用頻度が下がり、一等地にも関わらず閑散とした状態が続いていた。広島都心部を人中心・優先の都市空間にしていくことを体現するため、海外製のデザイン性に富んだ屋外用家具と円形の人工芝を設置することで滞留空間を仮設的に作り、利用頻度や利用形態を検証する社会実験とした。またコロナ禍の中での周辺店舗の支援も兼ねて、広場空間に仮設コンテナを設置し、日替わり出店も調整し実施した。また日常の延長にあるようなイベント、新しい日常生活に則したイベントなどを実施し、密になるような集客イベントは実施しなかった。

調査は複数の手法を用いて実施した<sup>2)</sup>。本研究の分析の対象であるアンケート調査は2021年3月27日11:00～15:00<sup>3)</sup>に実施した。アンケートはカミハチHHの事務局メンバーのうち、調査関連ワーキンググループ<sup>4)</sup>が作成した。選択式の設問と自由記述式の設問を組み合わせたもので、アンケート用紙を来場者に直接配布・回収する形式をとった。記入していただいている時は配布・回収者はその場を離れ、記入が完了するのを待った。アンケート項目は表1の通りである。

- 
- 2) ビデオ録画によるアクティビティ調査や仮設のコンテナでの売り上げ調査などを実施した。
  - 3) この日はカミハチHH事務局で用意した屋外家具等以外に、別団体による花の販売イベント用の一般的なテントが設置され、また午後に他団体によって都心部を巡回する形で実施されていたアコースティックライブもコンテナの前で行われた。
  - 4) 一般社団法人地域価値共創センター社員2名、外部アドバイザー2名、山口大学宋准教授、筆者の計6名で構成されている。いずれもカミハチHH事務局メンバーである。

木原：市民参画デザインの検証

表1：アンケート項目

|    |   |      |
|----|---|------|
| 1  | 「基町・紙屋町エリア」を訪ねる頻度はどれくらいですか？（最も近いものを1つお選びください）   | 単一選択 |
| 2  | 「基町・紙屋町エリア」を訪ねるときの主な交通手段は何ですか？（最も多いものを1つお選びください）  | 単一選択 |
| 3  | 普段「基町・紙屋町エリア」を訪ねるときの主な目的は何ですか？（最も多いものを1つお選びください）  | 単一選択 |
| 4  | 前問「3」で回答した目的で「基町・紙屋町エリア」を訪ねるとき誰と一緒にですか？（最も多いものを1つお選びください）   | 単一選択 |
| 5  | 普段「基町・紙屋町エリア」を訪ねるときに、もっともよく利用する商業施設を教えてください。（あてはまるもの全てをお選びください）   | 複数選択 |
| 6  | 普段の「基町・紙屋町エリア」での、1日の平均消費額を教えてください。（最も近いもの1つお選びください）   | 単一選択 |
| 7  | 本日はどのような目的で「基町・紙屋町エリア」を訪れましたか？（最も近いもの1つお選びください）   | 単一選択 |
| 8  | 本日、この場所（カミハチキテル-MOTOMACHI CRED URBAN TERRACE-）に滞在した（する）のはどの時間帯ですか？開始時刻から終了予定時刻まで教えてください。（あてはまるもの全てをお選びください） | 複数選択 |
| 9  | 本日は誰と来場されましたか？（最も多いものを1つお選びください）  | 単一選択 |
| 10 | この場所を知ったきっかけは何ですか？（あてはまるもの全てをお選びください）   | 複数選択 |
| 11 | この場所を利用した理由は何ですか？（あてはまるもの全てをお選びください）  | 複数選択 |
| 12 | この場所で飲食をしましたか？（最も近いものを1つお選びください）  | 単一選択 |
| 13 | この場所を利用して、良かった点を教えてください。（あてはまるもの全てをお選びください）   | 複数選択 |
| 14 | この場所についてご意見やご不満な点があれば教えてください  | 自由記述 |
| 15 | 本日、利用した／利用する予定の商業施設を教えてください。（あてはまるもの全てをお選びください）   | 複数選択 |
| 16 | 本日、「基町・紙屋町エリア」全体での消費額（予定も含む）を教えてください。※交通費、駐車場代は除く（最も近いもの1つお選びください）  | 単一選択 |

|                       |   |      |
|-----------------------|---|------|
| 17                    | 明日以降、この場所（カミハチキテル—MOTOMACHI CRED URBAN TERRACE—）をまた利用したいと思いますか？（最も近いものを1つお選びください） | 単一選択 |
| 18                    | 明日以降、この場所を利用するとすれば、どのような目的で利用しますか？（あてはまるもの全てお選びください）                              | 複数選択 |
| 19                    | 明日以降、この場所を利用するとすれば、どのような方法で飲食すると思いますか？（最も近いものを1つお選びください）                          | 単一選択 |
| 20                    | 明日以降、この場所を利用するとすれば、次はいつ訪れると思いますか？（最も近いものを1つお選びください）                               | 単一選択 |
| 以下はクロス分析用の属性に関するアンケート |   |      |
| 21                    | ご年齢（年代）   | 単一選択 |
| 22                    | ご性別   | 単一選択 |
| 23                    | ご職業   | 単一選択 |
| 24                    | お住まい  | 単一選択 |

アンケートを実施した結果、123の回答を得た。このアンケートからは1時間以上の滞在した人が約22%いたことが明らかになった。1回の都心来訪ごとの消費額は千円～3千円未満の消費が中心であった。

このアンケートの中で自由記述の設問である「14. この場所についてご意見やご不満な点があれば教えてください。」については、21の記述があった。他の設問で良かった点を聞いていることや設問14自体の表現から、否定的な意見ばかりになることも懸念されたが、肯定的な意見もあった。回答者が社会実験の位置付けを理解しているならば、広島都心部はどうあるべきかや都市空間に滞留することについてなど、ミライデザインに反映することができる言及を得ることを狙った設問であった。この回答を6章で比較分析に用いる。



## 5. カミハチキテルマチナカ市民フォーラム

カミハチキテルマチナカ市民フォーラム（以下フォーラム）は2021年8月1日10:30～14:00に広島市都心部の複数箇所で同時に実施した街頭イベントである（図2）。



図2 フォーラムの様子  
出典：カミハチ HH 事務局

10月のミライデザインの公開に先立ち、その周知と市民からミライデザインの対象エリアである広島都心部に関しての印象や利用実態などの情報を収集することを目的に実施した。カミハチ HH の代表が街頭で通行人に演説形式で語りかけるとともに、投票式アンケート・ヒアリング調査を実施した。パセーラ1階エスカレーター脇、そごう広島店1階東南角（時計下）、ひろぎん HD 本社ビル1階トゥモロウスクエア（屋内、屋外の2箇所）、パルコ本館1階正面玄関脇の4会場で実施した。各会場ともに屋台型のブースとボードを設え、興味を持って立ち止まった通行人に対して投票式のアンケートを実施し、引き続き任意でそのままその場にてヒアリングを実施した。

投票式アンケート調査は、図3を印刷したボードを作り、シールを貼る形式で投票を行った。この投票項目に用いた公共空間を導く原則（図3）は、アメリカ合衆国オレゴン州ポートランドにあるランドスケープデザインスタジオ PLACE が作成したものである。ミライデザインの策定にあた

GUIDING PRINCIPLES 公共空間を導く原則



AIOI STREET | HIROSHIMA  
MARCH 18, 2021

PLACE

図3 公共空間を導く原則のリスト  
出典：PLACE

り、カミハチ HH と PLACE は都市空間デザインについて議論を重ねている。その議論の中でも使われたリストであり、投票式アンケートの投票項目にも同じものを用いた。

図3の12項目のうち、紙屋町・八丁堀地区に必要なまたは希望する都市デザインはどれかを尋ね投票してもらった。また投票の際にはカミハチ HH が対象とするエリアのうち、紙屋町基町地区・紙屋町立町地区・八丁堀西地区・八丁堀東地区のどの地区に必要な都市デザインなのか、地区を特定してもらった。4会場での投票結果をまとめたものが表2である。

全ての会場の合計で425の投票があった。「4. 様々なタイプの座る場所の提供」がどのエリアにおいても最も多い投票数となった。人中心・優先の都心空間に変えていくステップの検討において参考になった。紙屋町基町地区では、「10. アクティビティを助長する・日常性+季節性」が次に多い項目であった。紙屋町基町地区では、コロナ禍以前のようなイベントが実施されず、アクティビティの多様性が下がっているため多くの票が集

木原：市民参画デザインの検証

表2 街頭投票結果

|         | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7 | 8  | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---------|----|----|----|----|----|----|---|----|---|----|----|----|
| 紙屋町基町地区 | 8  | 12 | 10 | 39 | 13 | 11 | 5 | 15 | 6 | 34 | 9  | 4  |
| 紙屋町立町地区 | 5  | 8  | 8  | 15 | 9  | 10 | 1 | 8  | 6 | 9  | 3  | 3  |
| 八丁堀西地区  | 14 | 7  | 6  | 25 | 9  | 14 | 1 | 5  | 3 | 11 | 7  | 6  |
| 八丁堀東地区  | 3  | 5  | 2  | 11 | 9  | 11 | 3 | 6  | 0 | 4  | 8  | 4  |

まったと考えられる。またその他の地区では、「6. 安全なアクセスの提供」が次に多い項目であった。交通の再編が求められていると考えることもできる。この調査においては、車中心・優先の都心空間を人中心・優先の都心空間に再生していくことは一定のニーズがあることが明らかになった。

各会場で投票式アンケート調査に参加した一般市民や来街者に対して、聞き取りと自由記述を組み合わせた街頭ヒアリングも実施した。ただし強制することはせず、投票のみでその場から離れることも許容した。ヒアリングテーマを紙屋町、八丁堀エリアの「思い出」、「記憶」についてとすることによって、これまでの都市空間の使い方や愛着を明らかにすることを目的とした。またそのヒアリングの中で今後の紙屋町・八丁堀地区に必要な都市デザインに対する言及があった場合、スタッフが聞き取り、手元にメモを残すことを行った。

ヒアリングの結果、130のコメントを収集することができた。「思い出」、「記憶」についてとしたことによって、過去についてのコメントが増えることが予想されたが、現在や未来への言及も見られた。直前に都市空間についての投票を実施しているため、都市空間に関するコメントが多かったが、食や買い物などのアクティビティに関するコメントも見られた。この収集したコメントを6章で比較分析に用いる。

## 6. 市民参加を通して得た情報の検証

本章では、導入した手法と場の概要と、4章でのアンケートの自由記述と5章での街頭ヒアリング調査の回答コメントを比較することにより導入した手法と場の効果の違いを分析する。

今回それぞれの手法と場を導入した時期は、どちらもミライデザイン立案の過程としては同じ段階にあったため、直接比較も可能であると考えられる。導入した手法と場と得られた結果を表3にまとめた。

まず収集できたコメントの数に大きな差があった。これは設問数との関係が大きいと考える。アンケート調査では選択項目が多く、またその選択項目の間に対して自由記述は必須回答ではないと捉えられたと考える。一般的なアンケートという手法に対して回答者は義務感や義理（断れなかつ

表3 比較表

| 手法   | アンケート調査                                       | 街頭ヒアリング調査  |
|------|---|--|
| 日時   | 2021年3月27日11時～15時                             | 2021年8月1日10時半～14時  |
| 場所   | 基町ふれあい広場1箇所<br>カミハチ2実施会場                      | パセーラ1階エスカレーター脇、<br>そごう広島店1階東南角（時計下）、<br>ひろぎんHD本社ビル1階<br>トゥモロウスクエア（屋内、屋外の2箇所）、<br>パルコ本館1階正面<br>玄関脇 計4箇所 |
| 設問数  | 自由記述1問（24問中）                                  | 自由回答1問（2問中）  |
| 対象設問 | この場所についてご意見やご不満な点があれば教えてください。                 | 紙屋町八丁堀エリアで印象に残っているまちの思い出を教えてください   |
| 対応   | アンケート票を渡してその場を離れ、回答後持ってきてもらう<br>またはスタッフが取りに行く | 投票完了後、時間があればという前置きのあと、スタッフが対話形式（投げかけ・聞き取り）   |
| スタッフ | 社会人1名、大学生3名                                   | カミハチHH構成員20名<br>大学生20名   |
| 回答数  | 21コメント（17%）<br>（アンケート自体は123）                  | 130コメント（30%）<br>（投票は425）   |

た) で取り組んでいることも考えられる。また表1の項目が文字で並んでいるアンケート票のため単調と感じてしまい、アンケート全体から何か気づく・知る機会や自由記述にて意見を主張する機会にまではなっていないと考える。一方、街頭ヒアリング調査では事前の投票式アンケートは一問しかなく、またその投票ボードも図3のように視覚的に情報を伝えるものになっていた。参画した一般市民や来街者が持ち合わせていなかったイメージや知識を得ることができた可能性が高い。そのため、その直後に実施された街頭ヒアリング調査に対して前向きに参画することができたのではないかと考える。

アンケート調査は社会実験の会場そのもので実施した。その日は他団体によるライブなど非日常に値するコンテンツが実施されていることから、目的を持って社会実験会場に滞留していた人も多かったと予想できる。そのような方々にとっては義務感で受け入れたアンケートはできるだけ簡単に済ませ自由記述には取り組まない意識が働いたことも予想される。

街頭ヒアリング調査は、イベント会場として使われるような場所ではなく、街角の片隅<sup>5)</sup> のようなところに仮設的にブースを立ち上げてそこを通りかかった一般市民や来街者に対して働きかけた。また同時に4会場で実施したことにより、一度別の場所で目にしていたことにより、次に目にした時には初見よりも興味・関心は上がっているのではないかと考える。一つの会場で実施するより偶然性が上がっていたと考える。

アンケート調査の総回答数に対する自由記述回答数の割合と、投票数に対する街頭ヒアリング調査で収集したコメント数の比率を比較すると、街頭ヒアリング調査の比率の方が約2倍高い。アンケート調査ではスタッフはアンケート回答者とコミュニケーションを取らず、街頭ヒアリング調査

5) パルコ本館1階正面玄関脇の会場は、ブースの隣からパルコの建物に沿うように別団体によるイベントが実施されていたが、そのイベントも街角で仮設的に会場を設えたコーヒーを中心にした飲食イベントであったため、また日頃より通行量の多い通りであることから、ライブが行われるなかアンケートを実施した社会実験の会場よりは目的を持って待ち構えているような方は少なかったと考える。

では積極的にスタッフが参加者に働きかけた。これはアンケートに気兼ねなく答えていただくための配慮だったが、当日の状況を考えるとできるだけ簡単に済ませようとする意識を助長することにつながったと考えられる。アンケートは誰もが一度は経験している手法であり既視感があるものとする。また特典はなかったため参加の動機が見出しにくくなっていた。街頭ヒアリング調査のスタッフ人数はアンケート調査のスタッフ数の10倍のスタッフが関わった。そのため通行人がスタッフと意気投合し街頭ヒアリング調査までの協力で承諾する確率は導入の間口が増える分上がると考える。街頭ヒアリング調査の方は、ヒアリングの前に図3を印刷したボードヘシールを貼る形式の投票というアクティビティを実施している。そのボードを眺めるだけでも都市計画や建築デザインを専門としていない人にとっては新しい気づきや知識を修得できた人も多いと思われる。その過程に好印象や新規性を感じた場合は、次のヒアリングに期待感を持って臨み、積極的に対話することでそれぞれが学習し合う関係になったのではないかと考える。

それぞれの手法によって得たコメントについて、語句の関連性を示した図を作成し比較分析する。図4、図5が得たコメントの語句の関連性を示す共起ネットワーク図である。共起ネットワーク図を比較すると、アンケート調査(図4)では社会実験という語句が出現していない。新しい日常の体験や滞留を促進することを目的としている社会実験であるが、逆に馴染みすぎて社会実験を実施中であること自体は周知が不十分であったことも考えられる。図5では実施場のそごうやパルコ、本通り、そしてミライデザイン対象エリアのカミハチが出現している。街頭ヒアリング調査を実施した場所自体から想起される記憶や思い出があったと考えられる。

アンケート調査の方では季節が3月のまだ寒い時期だった影響が図4からも伺える。逆に街頭ヒアリング調査の方では、8月の暑い日だったにも関わらず季節感のある語句の出現は少ない。時間を遡ることによって、季節感やその日の天候に左右されることなく、都市空間に焦点を当てたコメ



ントを回収できる可能性が高まることが考えられる。またアンケートの自由記述の設問がこの場所についてと聞いているため、その時点で身をおいている環境を捉えて記入していると推測する。そのため図4では、当日他団体によって設置されていた「白い」「テント」や「イベント」などの語句が出現している。また「イス」「テーブル」「席」「コンテナ」などの語句の出現が多いことから目の前に広がる景観を即物的・近視眼的に捉えていることがわかる。これは自由記述の前に答えている設問が実態について聞いているため、長期的な目線への意識につながりにくいと考える。街頭ヒアリング調査は、過去の思い出や記憶だけでなく、現代にも通じる内容や現状分析に近い関係性も出現している。例えば「本通り」「カフェ」,「パルコ」「買い物」などである。設問に時間の概念を組み込むと都市空間や目の前に広がる景観を多角的にも俯瞰的にも捉えることができる可能性があると考えられる。

以上より次の項目が市民参画デザインにおいて有効であると考えられる。

- ① 都市デザインについては、時間の概念を含む間接的な聞き方にする。
- ② 場や関わる人を増やすことで、場の偶然性を高める。
- ③ 対話を重視した新規性の高い手法を導入する。

①により都市デザインについて直接的に問うのではなく、間接的な設問（本研究では街頭ヒアリングにおいて紙屋町・八丁堀エリアの「思い出」,「記憶」について）とすることで、参画する一般市民や来街者も都市空間を多角的・俯瞰的に捉えることができると考えられる。また屋外での活動や調査であっても、当日の気候や環境に左右されにくい可能性も考えられる。②により多くの通行者や来街者は異なった目的を持っている（調査のための来街ではない）ため、偶然性を高めることによって参画の確率は上がると考えられる。それに伴い、参画する一般市民や来街者の多様性を高めることができると考えられる。③により多い設問で緻密に聞き出すよりも、



たった1問2問でも対話を重視した新規性のある手法を積極的に導入することで、スタッフと参画する一般市民・来街者が純粹に学習し合える関係となり、都市空間について思考するきっかけになり得ると考えられる。いずれもカミハチ HH におけるミライデザイン立案初期段階<sup>7)</sup>においては重要な効果であると考ええる。

課題としては、実施場所の選定は注意が必要である。イベント会場のようなところは避け、できる限り仮設であり偶然性が感じられる場所の方が望ましい。得られるコメントが導入の言葉や提示されるイメージで過度に誘導されないように注意すべきである。今回は民間団体によって一般市民や来街者の参画を促す機会を対象としているので、そこだけのことであれば気にする必要はない。ただしカミハチ HH のように、活動成果等を行政の上位計画に取り込んでもらうことを目標としている場合は注意が必要である。間接的な質問にすることは、コメントが誘導されることを防ぐ意味でも有効であると考ええる。対話においてスタッフ間で、言葉などを統一しておく必要もある。街頭ヒアリング調査における一般市民や来街者との最初の接触やアンケート調査における導入文や声かけについては特に注意が必要である。またスタッフ側は事前に一定の知識を持つ必要があると考ええる。カミハチ HH のミライデザインにおいては、大きなコンセプトや方針、図3の内容については理解しておく必要がある。本研究対象の場合、スタッフであったカミハチ HH の構成員に関しては定例会を毎月開いているため一定の理解があり、一緒に取り組んだ学生においても事前のレクチャーを実施しており一定の知識はあったと考ええる。

今回の両調査は、取り組みの裏付けやミライデザインの補完としては大きな効果を果たしている。特に街頭ヒアリング調査で得られたコメントを

7) 上位計画に組み込まれること、またビジョンが実際に達成されることをゴールとする過程における初期段階である。

もとに、ミライデザインのメインイメージに屋上空間の将来の新たな活用の様子が描き加えられた。投票で必要という声が多かった座る場所についても将来像のイメージパースに多めに書き込まれることとなった。アンケート調査に関しても社会実験中に実施したその他の調査結果と合わせて、社会実験<sup>8)</sup>後もミライデザインの検証として分析を進めている。

## 7. ま と め

市民参画デザインにおいて、①時間の概念を含む間接的な質問、②場の偶然性、③対話重視、などの有効な要素が明らかになり、カミハチ HH のミライデザイン立案過程における市民参画の手法や場の有用性が明らかになった。

街頭ヒアリング調査を行った後のカミハチ HH の定例会で振り返りを行った。その中でスタッフとして参加したカミハチ HH 構成員からは、成果が多かったという旨のコメントばかりであった。スタッフとして参加して一般市民や来街者と対話することにより、今まで以上に自分ごととなっていると考えられる。これもミライデザイン立案過程初期においては重要な効果であると考えられる。またカミハチ HH の構成員はさまざま業界の方がいて全員が決して都市計画や都市デザインが専門の方は少ない。しかしミライデザインの内容に関しては、定例会を通して専門性の高い知識を持ち合わせていたと考えられる。それにより十分に一般市民や来街者のコメントを専門的な領域に引き上げていた。

このようにビジョン立案初期段階のプロセスにおいては、機運の高まりを待つのではなく、アクションファーストの概念を持って内部からも機運の醸成を行うことが有効であると考えられる。アメリカ合衆国オレゴン州のポートランドにおいて、市民参画が条例に組み込まれているにもかかわらず

---

8) 社会実験であるため、カミハチ HH で設置したコンテナや屋外家具・人工芝は、期間終了と同時に撤去される予定であったが、屋外家具・人工芝については土地所有者が買い取り、常設化されている。

ず、形骸化せず市民参画が有意義なものとして効果を発揮しているのは、10年以上かけて仕掛けをしてきたからである（岩淵，2016）。カミハチ HH もターゲットイヤーを2045年としているため、まだ時間的な猶予があり、市民参画デザインを継続していく必要がある。また取り組みの段階に応じたどの手法を選択するか検討していく必要がある。

場の設えについても課題が明らかになった。特に社会実験について、新しい日常のあり方として伝わっていることは望ましいが、イベントの場として伝わっていることも認められた。しっかり社会実験として周知し、未来や新しい日常に思いを馳せることができるようにすべきである。そのような状況で市民参画の場と機会を設けると効果も上がると考える。

研究の課題としては、学生の関わりに関しては今後の課題としたい。街頭ヒアリング調査の振り返りを行ったカミハチ HH の定例会では、有識者の方のレクチャーも実施された。有識者の方には振り返りにも同席していただいていたため、街頭ヒアリング調査の様子についてもコメントをいただいた。その内容は学生を巻き込んでいるのが良いという内容であった。社会人だけではなく学生もスタッフとして入ることにより、偶然性も上がり、対話による双方向の学習効果も向上することが考えられる。学生がいない場との比較分析を今後行う必要がある。

この手法を他都市や他エリアで実施した場合との比較も今後の研究課題である。その中でも対象とするエリア規模との比較を行いたい。手法に対して有効な範囲設定の条件やビジョン立案における対象エリアの適正規模の分析を進める必要がある。

本研究では民間主導のプロジェクトにおける一般市民や来街者の参画の機会を研究対象とした。行政主導のプロジェクトとの比較分析を進めることも研究課題である。

またカミハチ HH はエリアマネジメント団体である。行政と民間団体や一般市民をつなぐ中間組織としてのエリアマネジメント団体のあり方につ

いても研究を進めたい。2008年に国交相から提唱されたエリアマネジメントの定義は「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」とある（国土交通省土地・水資源局，2008）。しかし社会情勢の変化やエリアマネジメントで取り扱う内容の多様化に伴い，エリアマネジメントの定義自体も日々変化していると考えられる。またエリアマネジメント団体のあり方も多様化している。主体として取り組んでいる団体もあれば，中間組織として存在する団体もあると考えられる。そのようなエリアマネジメント活動の中で市民参画がどう取り扱われているかも研究していく必要がある。

市民参画の研究を進めることによって，カミハチ HH のあるべき姿についても明らかになっていくと考える。

#### 引用文献・参考文献

- 生田尚志・堀越まい・佐藤将之（2020）「中心市街地活性化を目的とした拠点施設の運営と市民集団の活動展開による参加の形態——八戸市によるポータルミュージアム「はっち」と市民集団「まちぐみ」を事例として——」『日本建築学会計画系論文集』85(777), 2363-2373
- 岩淵 泰（2016）「多様性の中の参加民主主義——オレゴン州・ポートランド市における市民参加——」『岡山大学経済学会雑誌』No. 47(3), 209-225
- 岩淵 泰・セルツァーイーサン・氏原岳人（2017）「オレゴン州ポートランドにおけるエコリバブルシティの形成——都市計画と参加民主主義の視点から——」『岡山大学経済学会雑誌』48(3), 255-277
- 木原一郎（2017）「市民参加型ワークショップの手法に関する研究」『ひろみら論集』3, 55-64
- 国土交通省土地・水資源局（2008）『エリアマネジメント推進マニュアル』, P9, [https://www.mlit.go.jp/totikensangyo/totikensangyo\\_tk2\\_000068.html](https://www.mlit.go.jp/totikensangyo/totikensangyo_tk2_000068.html)（2021年10月29日最終閲覧）
- 佐藤翔輔・今村文彦（2018）「石巻市における震災伝承・震災遺構に関する3つの検討会議の事例分析：会議手法に対する有効性の検証と配慮すべき点」『自然災害科学』37(S05), 47-72
- 宋俊煥・鶴心治・小林剛士・趙世晨（2019）「ポートランド市の地域組織におけるコンパクトシティ政策への参加意識と活動特性に関する研究」『都市計画論文集』

- 54(3), 298-305
- 鶴田佳子・坂本 淳・海道清信・西芝雅美 (2017) 「オレゴン州ポートランド市の土地利用審査制度における住民参加プロセスに関わる住民組織の役割と活動実態——ネイバーフッド・アソシエーションを事例として——」『都市計画論文集』52(3), 544-551
- 三浦浩之 (2021) 「Central City 2035 Plan 策定における市民関与」『修道法学』44(1), 163-191
- 三矢勝司・秀島栄三・吉村輝彦 (2013) 「公共施設づくりにおいて地域密着型中間支援組織に求められる役割と成果に関する研究——岡崎市図書館交流プラザ Libra を事例に——」『都市計画論文集』48(3), 303-308
- Sherry. R. Arnstein (1969) "A Ladder of Citizen Participation" *Journal of American Institute of Planners* Volume 35, pp. 216-224 [http://lithgowschmidt.dk/sherry-arnstein/ladder-of-citizenparticipation\\_en.pdf](http://lithgowschmidt.dk/sherry-arnstein/ladder-of-citizenparticipation_en.pdf) (2021年10月29日最終閲覧)
- The Mayor's Bureau Innovation Project #9: Public Involvement Eileen Argentina and Jo Ann Bowman, Co-Chairs (2006) "Public Involvement Toolkit" <https://www.portland.gov/sites/default/files/2020-03/public-involvement-toolkit-10-12-06.pdf> (2021年10月29日最終閲覧)